

河合栄治郎の恋愛観

大竹 信行*

1 はじめに

河合栄治郎(1891-1944)は、日本では数少ない自由主義思想家の一人であり、とくに戦時中においてファシズム批判を正面から行った「戦闘的自由主義者」として知られている。昭和初期日本のファシズム化による言論弾圧は、1933(昭和8)年に滝川事件、1935(昭和10)年に美濃部達吉の天皇機関説事件を引き起こし、さらに矢内原忠雄や津田左右吉など自由主義者にまでその手が及んだ。河合栄治郎もまた1939(昭和14)年、弾圧によって著書4冊の発禁処分・教壇追放の悲劇にみまわれた。これは「河合事件」と称されている。

すでに拙稿[大竹2000]で指摘しておいたように、河合にはこうした自由主義者・社会思想家としての側面だけではなく、情熱ある教育者としての面をも併せ持っている。弾圧後も「学生叢書」や『学生に与う』といった著書によって教育者としてあり続け、これらの書は旧制高校生にとって必読書ともいうべきものであった。

さて、こういった自由主義者・教育者としての姿を「表の顔」とすれば、本稿ではいわば河合の「裏の顔」を描き出す。それは、これまでの河合栄治郎研究で取り上げられることのなかった恋愛面である。そして社会学においても、谷本奈穂が指摘しているように、恋愛は魅力的な研究テーマなのにもかかわらず、これまであまり対象とされてこなかった[谷本1998:286]。

恋愛においては多かれ少なかれ、そこに人間性が現れてしまうものである。河合においてもまた然りである。そこでまず河合の生涯における恋愛のあり方をみていく。そこには少年愛・不倫・女子学生への思慕という具合に多様性がみられる。次に、そうした体験を積んだ後で書かれた唯一まとまった恋愛論である『学生に与う』(1940)の「恋愛」章を解体し、彼の恋愛観がどのようなものであったかを明らかにしたい。

2 少年愛

『河合栄治郎全集』は第22巻および第23巻に「日記」が収録されているが、1920(大正9)年の英国留学前から始まっており、1910(明治43)年の一高生時代のものが刊行されていない。そのためにここでは河合栄治郎研究の必須文献ともいえる、彼の教え子であった江上照彦の手になる『河合栄治郎伝』(1970)をテキストにする。この中に一高生時代の日記も紹介されていて、そこから河合に同性愛的関係があった事実が臆面もなく指摘されている。

* 文教大学非常勤講師

河合は1908(明治41)年に一高(旧制第一高等学校)に入学する。そして2年生の時から大学を卒業するまでの間、毎夏2ヶ月を赤城山で過ごすことを習慣としていた。その最初の夏、後に東京帝国大学農学部教授となる、農学部学生的那須皓という人物にであう。那須も一高出身であり、高校生の時から夏は赤城山の大沼湖畔の旅館で勉強するのが常であった。そこに河合たち一高生が同宿し、互いに先輩後輩関係であることから親しくなったのである。

江上によると、1910(明治43)年の「赤城日記」に7月16日付けで次のように記されているという。

「写真を出して見て、那須兄のいかにも尊きを思ひ、兄よ弟よと云ふの潜越なるを思ふ」とあり、また、「八時兄様の小照を拝して黙祷す」とある。前年にはじまった両者の友情が、かなり親密なものになっていることを暗示する文句である。[江上1970:42]

この時、河合は赤城の旅館で他所へ旅行中の那須を待っていたのである。那須は旅先から河合に葉書を出し、那須を待ち焦がれていた河合はそれを読み歓喜するのだが、彼が到着するまでの間、二人の関係について悩んでいる。

しかし、彼は反省する。こんな相互の関係が果たして友情の発露と言えるのか、親兄弟や将来めとるであろう妻に語って恥ずかしくないかどうか……。 「那須兄よ、……兄様よ、余は兄を永く深く愛す。されど吾人の友情は一段の推敲を要せずや。……かく思い来りて亦、されど那須兄の膝に寄り、手を握り、接吻するは永久に続く能はざるかと思ひ、果敢なき感あり」と、彼は思い惑うのである。[江上1970:42-43]

「接吻」とあるように、河合と那須の関係は単なる友情とは言い難い。それはようやく那須が赤城に来てからの様子にもうかがえる。欣喜雀躍した河合は那須との日々を過ごすことになる。

木蔭で読み疲れ語りあきると、二人は湖にボートを乗り出して小島へ渡った。聞こえるのは鳴き交わす小鳥の声だけの寂寥とした中で、お互いが抱擁し接吻し、恍惚とした魅惑の世界に沈んで行って、時の過ぎるのを忘れた。[江上1970:43]

一方、那須は河合に対して英文の詩によるラブレターを送っている。このような二人の関係について江上は、「男女間の熱烈な恋愛に近い」と評している。そして河合はこうした関係に悩み、別れを決意する。

江上はさらに続ける。

しかし、それがあまりに官能的に傾いた時、榮治郎は反省し漸愧し、むしろ那須を傷つけるであろうことを恐れて、絶交を申し出た。那須はそれを肯じなかった。「ね、それだけはやめてくれ給え。どんな条件を課せられてもいい。しかし、絶交だけは僕には耐え難いんだ」と言って、彼は泣きだした。と、榮治郎はやにわかぶっていた帽子をかなぐり捨てて、相手にすがりついた、「今までどおり兄様と言わしてください」。二人は沼尻の上の森の中で、土にマントを敷いた上で、お互いの友愛がやがて作り出した愚かな仕業、そしてそれがこの絶交うんぬんに至った経過を、改めて語り合った。[江上1970:44-45]

こうして那須との関係は続いていく。河合が同性に示したこうした愛情は、何も那須一人だけに限ったことではない。他にも複数の友人に好意を持っていた。那須の弟である邦光に初めて会った時も、「邦光さんの愛らしさよ。皓さんを兄様とせば、邦光さんも兄弟ならんか。有難し、有難し」と日記に書いているほどだ。江上はこうした河合の同性との恋愛について次のように指摘している。

彼の愛の対象として登場する若者たちの群像をながめ、榮治郎があるいは歓喜に胸をおどらせたり、あるいは嫉妬に悩み苦しんだりしているさまから、ふと連想されるのが古いギリシアの「少年愛」の世界である。[江上1970:45]

竹内洋は、この河合の少年愛志向についてこう述べている。

河合には美少年愛好もあったようだ。このことは、高等学校時代にまでさかのぼる。といっても女学生における同性愛と同じように、旧制高校生や旧制中学生に同性愛があったことはすこしも不思議ではない。いずれも異性愛が閉ざされた中での、友愛の極まりの発現だったからである。[竹内2001:130]

確かに、末期の一時期に女子学生を入学させたことはあるが、一般的にいて旧制高校は男子のみが入学を許された。しかしはたして「異性愛が閉ざされた中での、友愛の発現」なのだろうか。そもそもギリシアだけでなく、日本にも男性の同性愛関係はあったのであり、前近代のそれは少年愛であったことはよく知られている。また、明治以降も薩摩藩の蛮風であったという少年愛が伝播したらしく、珍しいことではなかった。氏家幹人がくわしく説明しているように[氏家1995:58-86]、旧制中学や旧制高校では少年愛が流行していた。こうした当時の状況から男性同士で愛し愛される関係に抵抗がなかったものと考えられる。

江上は河合の結婚に関する箇所「一高時代の少年愛の波はもうはるかへ引いていって、かわりに異性愛の潮が上げてきた」と記述しているが、少年愛の性癖は少なからず続いている。その証左として、次の指摘を引いておく。これは、河合が東京帝大で教壇に立っていた時の学生への態度である。

河合の演習は、応募者が多いこともあって、成績がよくないと演習生にさせてもらえなかったが、中に成績がよくない学生がときどきまじっていた。そして、大抵は眉目秀麗な美少年であった。[竹内2001:131]

高弟である山田文雄も秀才であっただけでなく、「眉目秀麗な美少年」であったという。河合はこの山田がとくにお気に入りだったようで、京城帝国大学助教授職にあったのを、東京帝国大学助教授として呼び戻しているほどである。じつは、過去に河合が山田を東京帝大の助手にしようとしたのだが、これに失敗した経緯があった。そして河合が経済学部の派閥抗争の結果、多数派を形成して人事を掌握するに及び、1930(昭和5)年、山田を招聘したのである。河合によって多数派教授の弟子を助手に採用するといった思いのままの人事が行われ、山田の招聘もその一つであった。河合は山田を着任後1年半で教授に昇進させており、その思い入れがうかがえる[竹内2001:129]。

3 異性愛

河合の初めての女性との恋愛は、新渡戸稲造⁽¹⁾の娘の琴子が相手であった。河合は帝大卒業前から新渡戸の別荘を幾度か訪ねており、その時に二人は出会っていた。琴子の方が先に恋愛感情を抱き、その気持ちを河合が出入りしていた小野塚喜平次教授の夫人・孝に伝える。そして小野塚夫妻から縁談相手として琴子を紹介された。河合もこの「日本風でおとなしい人柄に育った、見るからに楚々たる風情の麗人」を愛するようになる。これは1915(大正4)年24歳で農商務省に勤めている頃のことである。そして翌1915(大正5)年に挙式という予定にまで話が進んでいたが、琴子が愛想をつかして破談となる。それは河合が「将来の壮大華麗な抱負経綸を述べ」てばかりで「琴子がひそかに待ち望んでいる甘く優しい言葉はついで彼の口からは出なかった」からであった[江上1970:71-73]。

河合はあきらめられなかったらしく、1年先輩の川西実三の日記には「実は一度はあまなりましたが、それでもくじけずに、もういっぺんプロポーズしようと思うんですがどうでしょう」と相談を受けた記述がある。川西は「河合君の学者肌で分析的な面が現れて、そんなことになったんじゃないだろうか」と感じた[江上1970:75] というが、この辺りに世慣れぬ学者の気質がうかがえる。

そして川西に説得されあきらめた20日後には、次の見合い相手との縁談がうまくすすんでいるという報告をしている。この女性が妻となる国子で、父は小野塚と並んで日露戦争時の「帝大七博士」の一人であり、東京帝国大学経済学部初代学部長の金井延である。琴子との別れから2ヵ月後の1917(大正6)年2月には婚約が成立している。

結婚後も恋愛事件があり、それはすなわち「不倫」である。そして、その対象は教え子である女子学生にも及んでいる。事実としては、1933(昭和8)年頃、43歳の河合は同僚の荒木光太郎の妻と不倫関係となった。『河合榮治郎全集』所収の『日記Ⅱ』がこの時期の日記なのだが、不倫関係の記述のある日の日記は掲載されていない。ここでは河合の恋愛体験を提示することが目的なので、竹内洋がごく簡単にまとめた部分を引用しておくことにする。

河合には多くの艶聞があるのは、周知のところだが、有名なのは、荒木光太郎教授の妻との不倫である。昭和八年の河合の日記には彼女のイニシャルmが何回も登場し、穏当ではないことが書かれてある。「mのことを思うと狂える如くなる」(昭和8年3月1日)とか、「少し遅れてm子を訪い、休み前から休み中にかけての話をすっかりした。今夜はとても愉快であった。家に戻ったのは朝の三時であった」(同年9月23日)などと。m子の夫である荒木教授は同僚教授だから尋常ではない不倫愛である。

[竹内2001:129]

次に、教え子への恋愛感情についても取り上げておこう。河合の大正10年6月の日記に非常勤講師で出校していた東京女子大学の学生「A」に対する思いのたけが綴られている[江上1970:125-133]。河合は帝国大学で教鞭をとっており、非常勤講師を兼職することを好まなかった。それなのになぜ東京女子大に限って2年半もの間、式典や集会にまで出席するほど熱心であったのか。その理由は学生が女性だからである。この点を江上は次のよ

うに述べている。

端的に言って、榮治郎はフェミニスト⁽²⁾だった、俗な言葉でいえば女好きだった、ということだろう。榮治郎は昭和十四年十二月から十七年にかけて、毎月一回特に女性面会日を設けて、自宅に美しき河合ファンの群れを迎え入れた。東京女子大、お茶の水女高師、日本女子大、明大女子部の生徒たちがおもな来訪者だった。[江上1970: 124]

河合は女子学生を恋愛対象として意識しており、女子大への出講はいわば「確信犯」であった。教師という立場にある河合が女子学生をどのように見ていたのかは、次の本人の発言に明らかである。

師弟の間というものは、それが異性であると非常に違ったものがあり、私はどうしても恋に似たものになってゆくんじゃないかと思えます。けれども私はそれでいいと思えます。それをうまくコントロールしてゆくときに、始めて本当の教育が出来るのではないかと思えます。弟子の方もやはりその気持ちでいいと思えます。[江上1970: 125]

フェミニズムの洗礼を受けた現在の視点でみるならば、このような女子学生に対する態度はセクシュアル・ハラスメントであると非難されてもしかたがない。そもそも『学生に与う』は「学生」と銘打たれてはいるが、その「学生」とは明らかに男性に限定されている。河合は女子学生を男子学生と同等にはみていなかったのであり、ジェンダー・バイアスがかかっていたといつてよい。

こうした体験を踏んでいった河合は恋愛に対しどう考えるようになったのか。そして学生に恋愛をどのように説いたのか。次に、50歳を迎えようとしている時に執筆された『学生に与う』の「恋愛」の章から、その恋愛観を解体していこう。

4 「恋愛」概念の規定

河合は1939(昭和14)年に東京帝国大学の教官職から追放された。冒頭で述べた、いわゆる「河合事件」である。不幸にも教壇を去ったのであるが、それでもなお教育者であり続けた。それは学生への書を編集・執筆することによってなされ、その思想と情熱は「学生叢書」シリーズおよび『学生に与う』に集約されている。

さて、『学生に与う』は2部構成をとっている。第1部では「価値あるもの」として学問・道徳・宗教などが説かれ、第2部は「私たちの生き方」として、河合によると各論にあたるということだが、学生の生活全般について語られている。ここに「恋愛」という項目があり、学生に対して恋愛論が説かれている。

河合によれば、愛には一般愛と特殊愛があるという。一般愛とは「人格性をもつ故をもって人間に対する尊厳が起り、われも人も人格の成長を為しつつあることから、同情共感が湧きこれが愛」となったもので、同胞愛を指している。これに対し特殊愛は特定の一人か二人への愛であり、具体的には親子愛・師弟愛・友情のことであって、それぞれを題名に章として設定され説かれている。

その上で「恋愛」の章では、「恋愛は男女間における特殊愛」と規定し、他の特殊愛との違いについて次のように述べている。

恋が他の特殊愛と異なる点は、恋が男と女という性別に基礎を置いていることである。特殊愛はすべて自我の特殊性によって成立するが、男女の性別はおおよそ特殊性のうちの最も顕著な特殊性であるから、まずこの特殊性が恋愛の成立する前提要件となり、次いで相互の個性が問題となる。[河合1940=1955:256]

河合は恋が性欲から発生したという言説を承認している。これは当時までに流布していた精神分析学の「恋愛と性欲」に関する知見のことであり、『学生に与う』に先立つこと約20年前に厨川白村が『近代の恋愛観』（1922）で「両性間の恋愛が性欲に根ざしている事は今人誰しも疑わないところ」と述べたものである。赤川学のいう「セクシュアリティの近代」のエピステーメーとして「恋愛と性欲の二元論」とともに現れた「恋愛至上主義ないし霊肉一致論の系譜」の上に、河合も存在しているといつてよい。

河合は白村のいう恋愛の「芸術」化と同様のことを、性欲という生理的な面に人間は精神によって美しい衣を着せていると説明する。そして男女間を日常的方面と生理的方面の二者に分け、後者のような性欲による関係を「色」とし、「色と恋とは生理的方面のみに限局するか、精神的方面をも包含するかに差異がある」という。精神的方面にも二つあり、それは芸術的と人格的であって、例えば和歌で恋を歌った場合は芸術的要素が加わっている。かくして、色から恋への進化は自然から精神への進化に他ならないと結論している[河合1940=1955:257]。

河合が白村を読んでいた可能性は大いにありうる。白村は大正期、東京朝日新聞紙上に「近代の恋愛観」というコラムを書いたりしているので、その時20代後半の河合はまず読んでいたであろう。すくなくとも精神面を重視しより高い次元とみなすことは、白村が恋愛は「動物とちがって人間の進化と共に、浄化させられ醇化せられて最高至上の道徳となり芸術となっている」と述べていることと同一であることはまちがいないのである⁽³⁾。

ところで、1990年代末頃から氏家幹人や川村邦光、佐伯順子など日本近世史や日本学・文化論研究者が、前近代(江戸時代)の「色恋」について一般書をだし、江戸期の性愛がテーマとして扱われるようになった。それらは江戸時代の性的・肉体的な関係性と密着した「色恋」にたいする賛美・理想化する傾向があるが、「恋愛」という概念が導入される以前の日本人の考え方を知らず興味深い⁽⁴⁾。ちなみに佐伯順子は「色恋」という概念について『「色」と「愛」の比較文化史』（1998）で次のように述べている。

「恋」という言葉は江戸時代以前にもあった。それは「色恋」という形で「色」と接合することにより、非日常的な情熱としての男女関係を表現していた。[佐伯1998:348]

河合も「色恋」という前近代の概念を使っているのだが、明治期以降に「恋愛」概念が輸入⁽⁵⁾されるに及び「色恋」も変容していく。すなわち、北村透谷にみられるプラトニック・ラブの導入である。佐伯は明治期の男女関係の変化を次のように説明している。

肉体＝低俗、精神＝高尚という近代の図式を確立するためには、肉体関係を分離しない「色」という言葉はいかにも不適當であった。そこで新たに「愛」という言葉が

持ち出された。明治期の日本人の知識人は、loveをいわゆるプラトニック・ラブという狭い意味に解釈し、その翻訳に「愛」「恋愛」という言葉をあてることで、日本の男女関係を「色」(肉体)から「愛」(精神)へと変革させようと図ったのである。[佐伯1996:170]

Love(=恋愛)という概念の輸入以後、色恋から恋愛と変容していく中で、河合もまた伝統的な「恋」を新しい概念である「Love」と重ねて捉えていたわけである。

5 美貌の価値化

河合によれば、他の特殊愛と比しての「恋」の特質は美的要素であるという。ここで、女性の外見的な美しさ・美貌が問題にされている。「もし私は美人でなくともよいという男性があれば、他の要素が償って余りあるというのでない限り、無欲恬淡はうらやましいが、美的能力の欠格者であることは、はなはだ遺憾である」[河合1940=1955:258]というように、女性に対して美人であることを求める考え方を打ち出している。

ただしここでいう「美人」とは、誰しもが美人と認めるような女性を指しているのではない。「いわゆる美人でなくともよいということならば、遺憾なことはない、恋における美の標準ほど、主観的なものはないからである」として、美人に対する主観性、要するに「好み」を認めている。このようにたとえその基準が主観的であれ、恋における美的要素の加味を主張するのである。

現在では異性を「顔」で選ぶのか「性格」で選ぶのかという形で問題設定されることが多く、誰しも一度くらいは話題にしたり耳にしたりしているだろう。私自身、女子学生から「男性は、女性の顔と性格のどちらを重視するか」という旨の質問を幾度か受けたことがある。また「女性は顔じゃありません。性格です」という男性に対する非難の声も聞いている。この「顔と性格」云々と関連していえば、明治期に誕生した「美人は性格が悪い」という言説も、未だに人口に膾炙している。もちろん現在にあって河合の美人推奨論を公然と口にしたならば、女性から凄まじい反感を買うに違いあるまい。では、一体なぜ河合はこのようなことを堂々と書き、そしてそれが社会的に許されたのか。

当時、社会科学はカント哲学とくに新カント派の絶大なる影響下にあった。河合もまたカント哲学の勉強には熱心で、カント全集を読破したばかりかドイツ社会思想の研究対象としているほどである[山田1953:281]。河合は、自我を知識的・道徳的・芸術的活動の三つに区分している。そして、それぞれの理想が真・善・美であるとしている。人格とは、この真・善・美の調和した主体であると説かれ、カントの人間論が敷衍されていることが看取できる[河合1940=1955:53-54]。

河合は「友情」(1937)という文章の中で、親子、兄弟姉妹、夫妻、師弟、恋人、友人などを「愛の関係」と呼び、これらを「自然発生的」と「目的意識的」とに区分している[河合1937:136-138]。恋愛は「目的意識」であるとされおり、ここには選択の自由が生ずる。その要件として河合は美を求める。個人によって基準は異なると認めつつも、美貌にこだわらない男性を「美的能力の欠格者」と言いきっている。このような美的要素に価値を置

く見方は、芸術的活動が人格の重要な要素であり、理想としての美を求めるといふ人格論の把持によるものであろう。

河合が主張したような女性の容貌・美人に関する言説の歴史は、井上章一の『美人論』(1991)に詳しい。井上によれば、美人を排斥する「美人罪惡論」は明治期の修身教科書や人生論にみられるという。これは、江戸期までは結婚相手の女性を家柄によって選んでいたのが、明治期になって自由恋愛の時代となり、姿形が求められるようになった。そして下層階級の美人が玉の輿に乗るようになったための倫理的な反発であるとする。この美人罪惡論の衰退は両大戦間期頃からで、美人の商業的有用性も時を同じくしている。以後、打って変わって美人肯定論へと転成し、美人の範囲も拡大した[井上1991=1995]。河合の主張は1940(昭和15)年の太平洋戦争期に出されたものである。この時期に成立していた美人肯定の言説の流布が、河合による女性の美貌の価値化が少なくとも批判されなかった原因と考えられる。

6 恋愛思想の混在

河合の恋愛論には当時の一般的な言説がとりこまれている。それは恋愛至上主義とロマンティック・ラブであるが、完全な形で導入されているわけではない。ここで、この二つの恋愛思想がどのように取り込まれているのかみていきたい。

まず、前者について。白村に代表される、生殖・結婚に恋愛がなければならないという恋愛観を恋愛至上主義という。これは恋愛なしの関係は動物的であり、人間的であるためには恋愛が必要であるという考え方である。このことを表した白村の有名な章句に次のようなものがある。

たとひ一夜の契りと雖も、そこに愛が存在して居たならば、夫れは確かに一種の結婚であって売淫ではない。愛なき夫婦関係は、たとひ共白髪の四十年五十年の長きに亘らうとも、そして人間の拵へた制度が如何に之を認めようとも、神の最後の審判廷において、夫れは明らかに一種の強姦生活であり売淫生活である。[厨川1922:29]

河合の恋愛論では、前章で指摘した白村の恋愛を芸術にまで高める思想だけでなく、この恋愛至上主義もまた導入されている。

恋愛は当然に結婚を伴わなければならない。結婚は必ずしも恋愛あることを必要としなくとも、恋は結婚を前提として覚悟して為さなければならない。結婚の覚悟なくして恋愛を楽しもうとするのは、恋を弄ぶものである、相手の人格性を弄ぶものであり、自己の人格性を弄ぶものである。[河合1940=1955:262]

この章句からわかるように、恋愛の帰結として結婚を要求する点で恋愛至上主義的要素が見られるのであるが、結婚それ自体には恋愛が必要ないといっている点で白村と異なり徹底されていない。ここに、恋愛至上主義と、保守的な「家」制度の下での婚姻の思想が同居していることを看取できる。

近年の家族史研究の成果は「家」制度が封建遺制などではなく、明治政府によって民法として創出されたものであることを明らかにしている[上野2000:69]。この結婚観は「家」

制度によって身についたものであろう。言うまでもなく、結婚は家同士の結びつきであり、前提としての恋愛感情は求められなかった。

次に、後者のもう一つの恋愛思想についてみていこう。フェミニズムの提示した用語としてロマンティック・ラブ・イデオロギーというものがある。小谷野敦は「ロマンティック・ラブとは何か」という文章の中で、ロマンティック・ラブがフェミニズム批評の術語でありロマンティック・ラブ・イデオロギーから派生したと述べ、さらに次のように総括している。

ではロマンティック・ラブ・イデオロギーとは何か。それは、一般に、恋愛・結婚・性交の三位一体体制と呼ばれ、結婚のために恋愛が必要であり、性交のためには結婚が必要であり、性交のためには恋愛が必要である、という考え方である。そして、このイデオロギーによって女性は結婚という軛へと追い込まれるのだが、その際「ロマンス」によって女性は「ロマンティック・ラブ」への憧れを内面化するというもので、男性支配社会による近代的な女性の囲い込みの装置として、西洋近代に発して漸次日本などにも広まったものとして捉えられている。[小谷1999:67]

A. ギデنزは『親密性の変容』(1992)の中で、「ロマンティック・ラブ的愛着では、崇高な愛情という要素が、性的熱中という要素を制していく傾向がある」[Giddens 1992=1995:65]と述べている。このロマンティック・ラブの傾向は河合にもみられる。

恋の中にある者は、けっして性欲を求めてはならない。男性は彼が女性を真に愛するなら、性欲を考えることも潔しとはしまい。性欲を求めるかどうかは、恋の品質を測定するバロメーターである。[河合1940=1955:265]

このように恋愛中の性的関係は認めていない。この点、恋愛の果てに結婚し性交するという三位一体論と共通性がみられる。しかしながら、この河合の恋愛観はロマンティック・ラブ・イデオロギーとは言い難い。それは先の引用文にみるごとく、恋愛の結果として結婚を要求しているが、結婚の前提として恋愛を要求していないからである。

7 結語

河合の社会思想、すなわち自由主義の思想形成に関しては、このところ史学の分野から研究が発表されており、新渡戸稲造・内村鑑三といったキリスト教思想、イギリスの社会思想家T・H・グリーンの影響が指摘されている。また最近では、松井慎一郎が『戦闘的自由主義者河合榮治郎』(2001)のなかで、河合の社会政策論がマルクス主義経済理論に影響されていることを考察している。

河合の思想や学問はイデオロギーを超えて様々なものが取り込まれ、それらが複雑な調合(河合のいう「接続」)によって形成されている。恋愛観についても同様のことが言えるのではないか。セクシュアリティには少年愛、不倫、教え子への恋愛感情があり、言説には美貌の価値化、恋愛至上主義、ロマンティック・ラブ・イデオロギーが変形されて取り込まれている。

河合の恋愛論は、近代化していく日本にあって移り変わる様々な恋愛思想を内面化して

いる。彼自身の恋愛経験には前近代な要素があり、恋愛論には近代的な言説が取り込まれている。その恋愛論が展開された『学生に与う』の刊行4年後、1944(昭和19)年に河合は逝去する。そして敗戦後、昭和30年代に入ってからロマンティック・ラブが昇華され「純愛」が登場する[藤井1999]。河合の恋愛観は、明治期の残滓と、戦後に変容していく恋愛観の萌芽が見出せるものであったといえるのではないか。

【註】

- (1) 新渡戸は河合が入学する2年前の1906(明治39)年に一高校長に就任し、その絶大な影響力は「ニトベ宗」と呼ばれるほどであり、河合もまたニトベ宗の一人であった[松井2001:14-15]。
- (2) ここで使われている「フェミニスト」とは男女同権論者のことではない。日本における特用である「女性に甘い男性」の意である。
- (3) 北村透谷は1892(明治25)年に「好色は人類の最下等の獣性を縦にしたるもの、恋愛は、人類の霊生の美妙を発揚すべき物」と述べている。佐伯順子は「こうした発想は透谷に始まるものではなく、透谷以前の明治の知識人の間で共用されたものであった」[佐伯1996:168]と指摘している。河合の考え方は直接には白村の影響であるが、土台にはこうした明治期の言説の流布がある。
- (4) 柄谷行人によると「恋愛」は12世紀の西欧に発生して近代日本に伝わったのであって、古代ローマやギリシア、前近代の日本にはなかったという[柄谷1988]。佐伯は、江戸期の性愛は肉体と精神を分節しない「色」であったのに対し近代になって西洋から「愛」という理念が広まったと説く。小谷野敦は、柄谷の説と柳父章による明治20年代にloveの訳語として「恋愛」という翻訳が生まれたという説の二つが、佐伯の説の淵源になっていると指摘している。[小谷野1999:68]
- (5) Loveに「恋愛」という訳語が当てられた経緯については、柳父章『翻訳語成立事情』(1982)に詳しい。柳父によれば、1890(明治23)年に岸本善治が『女学雑誌』でバルザック批評の中で、西欧の概念として使用した。この岸本の恋愛観が北村透谷に継承されていくわけである。

【文献】

- 赤川 学 1999 『セクシュアリティの歴史社会学』勁草書房。
- 朝日新聞社編 1997 『朝日新聞の記事に見る恋愛と結婚〔明治・大正〕』朝日新聞社(朝日文庫)。
- 江上照彦 1970 『河合榮治郎伝』社会思想社(『河合榮治郎全集』別巻所収)。
- 藤井淑禎 1999 「純愛の系譜」(『近代日本文化論Ⅱ愛と苦難』所収)岩波書店。
- Giddens, A. 1993 *The Transformation of Intimacy: Sexuality, Love and Eroticism*, Stanford Univ Pr. = 1995 松尾精文・松川昭子訳『親密性の変容—近代社会におけるセクシュアリティ、愛情、エロティシズム—』而立書房。
- 井上章一 1995 『美人論』朝日新聞社(朝日学芸文庫)。
- 柄谷行人 1988 『日本近代文学の起源』講談社(講談社文芸文庫)。
- 河合榮次郎 1940 『学生に与う』日本評論社=1955社会思想社(現代教養文庫)。
- 1937 「友情」(河合榮治郎編『学生と生活』所収)日本評論社。
- 小谷野敦 1997 『〈男の恋〉の文学史』朝日新聞社(朝日選書)。
- 1999 「ロマンティック・ラブとは何か」(『近代日本文化論Ⅱ愛と苦難』所収)岩波書店。
- 2000 『恋愛の超克』角川書店。

- 厨川白村 1922 『近代の恋愛観』改造社.
- 松井慎一郎 2001 『戦闘的自由主義者 河合榮治郎』社会思想社.
- 大竹信行 2000 「教育者としての河合榮治郎—その高等教育思想と活動—」(白山社会学会『白山社会学研究』第8号所収)
- 佐伯順子 1996 「『恋愛』の前近代・近代・脱近代」(『岩波講座現代社会学10巻 セクシュアリティの社会学』所収).
- 1998 『「色」と「愛」の比較文化史』岩波書店.
- 竹内 洋 2001 『大学という病—東大紛擾と教授群像』中央公論新社(中公叢書).
- 谷本奈穂 1998 「現代的恋愛の諸相—雑誌の言説における社会的物語—」(日本社会学会『社会学評論』49巻2号所収)
- 上野千鶴子 1994 『近代家族の成立と終焉』岩波書店.
- 1996 「序文」(ジェフリー・ウィークス『セクシュアリティ』所収)河出書房新社.
- 氏家幹人 1995 『武士道とエロス』講談社(講談社現代新書).
- 1998 『江戸の性風俗 笑いと情死のエロス』講談社(講談社現代新書).
- Weeks, J. 1986 *Sexuality*, Ellis Horwood Ltd. =1996上野千鶴子監訳『セクシュアリティ』河出書房新社.
- 山田文雄 1953 「河合榮治郎先生を語る」(社会思想研究会編『わが師を語る—近代日本文化の—側面—』所収)社会思想研究会出版部(現代教養文庫).
- 柳父 章 1982 『翻訳語成立事情』岩波書店(岩波新書).